連歌作品と古注釈の成立について

――天文年間の宗牧注を起点として――

浅井美峰*

一　はじめに

連歌の古注釈は、連歌作品の単なる鑑賞のためのものではなく、先達の連歌を学ぶため、連歌実作のために読まれたものである。[1] そのため、基本的に平明な分かりやすい説明が為されている。このような連歌の古注釈は、どのような特色を持つのであろうか。

本稿では、その古注釈の中でも詳細な記述が特徴とされる連歌師宗牧の百韻の注釈を取り上げ、連歌作品とその古注釈の成立事情について考えたい。宗牧は、宗長・宗碩に師事し、その師の没後、天文九年頃から北野の宗匠職を受け継ぎ、連歌の第一人者となったとされる。[2]

まず、宗牧の古注釈について概観する。宗牧の古注釈を付注作品の成立順に挙げると、次のようになる。作品名を挙げ、括弧の中にその連衆を入れ、次に、連歌の張行された年と宗牧の付注年をそれぞれ掲げた。

『湯山三吟百韻』注（宗祇・宗長・肖柏）
　延徳三（一四九一）年／天文七（一五三八）年
『小松原独吟百韻』注（宗祇）
　延徳四（一四九二）年／未詳
『宗祇独吟何人百韻』注（宗祇）
　明応八（一四九九）年／未詳
『矢嶋小林庵百韻』注（宗長・宗牧）
　大永七（一五二七）年／天文七年
『享禄五年住吉法楽百韻』注（三条西実隆・宗牧）
　享禄五（一五三二）年／天文七年
『天文九年梅宗牧両吟百韻』注（近衛稙家・宗牧）
　天文九（一五四〇）年／天文十一（一五四二）年
『天文十三年十二月宗牧独吟百韻』注（宗牧）
　天文十三（一五四四）年／天文十四（一五四五）年
『天文十四年二月宗牧独吟百韻』注（宗牧）
　天文十四年／天文十四年
『天文十四年土岐原治英所望宗牧独吟百韻』注（宗牧）
　天文十四年／天文十四年

千句や句集ではなく百韻に注釈が付されている点、独吟・両吟・三吟に限られる点、多くの注釈は天文年間に成立している点が注目される。この注釈を、その性格から三つのグループに分ける。第一グループは、『湯山三吟百韻』注、『小松原独吟百韻』注、『宗祇独吟何人百韻』注で、宗牧が師の宗長やその師である宗祇の作品、言わば規範とするのにふさわしい作品に対して注を付したものである。第二グループは『矢嶋小林

庵百韻』注、『享禄五年住吉法楽百韻』注、『天文九年梅宗牧両吟百韻』注で、宗牧自身が師の宗長や、三条西実隆、近衛稙家のような貴顕とともに詠んだ作品の注釈である。第三グループは、『東国紀行』に記された、天文十三年から十四年にかけての旅中の独吟の連歌の注釈である。

まず次節で第一グループの百韻注について、どのように書かれた物かを見ていく。

二　第一グループの百韻注

まず、一つ目のグループとした『湯山三吟百韻』・『小松原独吟百韻』・『宗祇独吟何人百韻』の注の成立事情について確認する。[3]

『湯山三吟百韻』は宗祇とその高弟の宗長・肖柏によって延徳三年に巻かれた百韻で、先行する長享二年張行の『水無瀬三吟百韻』と並んで、宗祇の代表的な作品として広く読まれたものである。宗牧注の本奥書に「此の一座、柴屋老人にいささか尋ね侍る事は有りながら」とし、三句目の注にも「此の懐紙周防へ下されし時、大守政弘態以飛脚、第三の趣、祇公へ御尋之由、宗長物語申され侍り」とあり、宗牧が宗長（柴屋軒）からこの百韻について聞いたことが注釈に取り込まれている。金子金治郎『連歌古注釈の研究』によると、宗牧注の他に注者未詳の注釈が四種類存在する。

『小松原独吟百韻』は延徳四年に宗祇が紀州小松原城主湯河安房守政春の求めに応じた独吟百韻である。本奥書に「此一座は孤竹斎、寒夜之雑話の次に各もよほして問侍しを其まま記しつけ侍りぬ」とあり、宗牧（孤竹斎）が直接記した注釈ではないが、宗牧からの聞き書きによるものであることが分かる。多くは短文で簡潔に句の内容を説明している。

『宗祇独吟何人百韻』は明応八年に宗祇が四か月掛けて完成させた独吟百韻である。注釈については、金子金治郎『連歌古注釈の研究』で、本奥書に「宗牧註之」（東大本）、「宗長以直談被注之」（金沢本）とあることから、宗長の談話による宗牧の注だとしているのに従って宗牧注と見ておく。他に宗牧と同時代の周桂の講釈による注と、それに近世になって西順が私案を書き込んだ注が存在している。

このようにして見ると、この第一グループの注について、前節で規範的作品に付注していると述べたが、師の説を取り入れて注釈が書かれていることも分かる。宗長から宗牧へ、宗牧からその門人等へと作品の注釈が受け継がれていく様子の一端が読み取れる。

三　第二グループの百韻注

次に第二グループの『矢嶋小林庵百韻』・『享禄五年住吉法楽百韻』・『天文九年梅宗牧両吟百韻』の注の成立事情について確認する。[4]

『矢嶋小林庵百韻』は、大永七年一月に近江国矢嶋小林寺に於いて、三条西実隆の発句に続けて宗長と宗牧が二人で詠んだもので、宗牧の自注からは、宗長の指導によって句を修正する様子等が窺われる。[5] また、八四番句「あらはれぬべく恋ぞなり行」の注に「此一句遣句ながら、少々秀逸にもまさり侍らむ。連歌の極めたる大事也とぞ。歌に地歌と申し侍るも如此の事とぞ。境に入る人に許されたる上にならでは仕りがたかるべき由、此懐紙一覧の次に宗碩も申し侍り」とあり、作品が完成してその懐紙を見せた時の宗碩の説も注釈に取り入れられているのが分かる。

『享禄五年住吉法楽百韻』は、享禄五年一月に宗牧が三条西実隆邸を

訪れ、間を開けつつ四日程で完成した作品である。『実隆公記』[6]の享禄五年一月十四日・十八日・二十一日・二十二日条に宗牧との連歌の記事が見える。実隆の歌集『再昌草』[7]御所本一〇〇三番にも、享禄五年正月十九日と二十日の歌の間に発句「春の色染め出だす海のみどり哉」が載り、その詞書に「宗牧法師、住吉法楽とて所望の発句」と有り、宗牧の熱意によって実現した百韻であることを感じさせる。

この百韻の七五番句と七六番句の付合の注を見ると、次の傍線部のような記述がある。

75山梨のみの年切りを花に見て　牧
76春はありけりおふの浦波　雪

前句に寄る所、山梨には年切りあれども、浦波の花は毎春変はらぬ由也。身と云ふ字も大事也。此の付様、人あまた不審し侍り。花の事なり。

花咲てみならぬものはわだつみのかざしにさせる沖つしらなみ

桜あさのおふの浦波立帰りあかでぞみつる山なしの花

これは、他の人々に見せた際に、この付合がどのように付いているのか「不審」だと言われたが、これは前句の「花」を波の花とすることできちんと付いている、と説明したものである。さらに、波を花に見立てる証歌として「花咲て」の歌（後撰和歌集・羈旅・一三六〇・小町、第三句「わだつうみの」）を挙げ、「苧生の浦波」と「山梨」の花を詠む例として「桜あさの」の歌（新古今和歌集・雑上・一四七三・俊頼、第四句「見れどもあかず」）を挙げ、付合の根拠を示している。[8]

この注では、「人あまた」とあるので、作品完成後に座に参加していない人々にその作品を見せ、そこで質問されたり指摘されたことを注釈に取り込んでいる、という点が注目される。

次に挙げる『矢嶋小林庵百韻』・『享禄五年住吉法楽百韻』の宗牧注を載せる宮内庁書陵部桂宮本の奥書[9]に、

右二百韻、備御一覧候処に、宗長古人申し聞せたる次第、一々記して参らすべき由、貴命とは申ながら、憚の関のはばかり無きにあらず、殊更帰京の御いとまなど申し上げたるにて、竹の泊りのとまり難く、一夜二夜の仮臥もしつく、舟出のぬさ取りあへず筆に任せたる事共なりかし。芳言を添へられし迷惑仕たる趣御披露所仰候也。

天文第七
六月三日　　宗牧

半隠軒

とある。この奥書については米原正義、木藤才蔵に考察があり、「半隠軒」が畠山義総被官の飯川半隠軒宗春で、この注釈は畠山義総にあてたものだろうとされる。[10]「右二百韻、備御一覧候処に、宗長古人申し聞せたる次第、一々記して参らすべき由」とあることから、もともと宗牧は二つの百韻をそのまま見せようとしていたが、「貴命」により、宗長の指導の内容をもとに注釈を認めておくっていることが分かる。[11]

『矢嶋小林庵百韻』・『享禄五年住吉法楽百韻』の宗牧注について見てきたが、宗牧が前者は宗碩に、後者は広く人々に見せていること、また、宗牧に注釈を依頼した畠山義総かとされる人物が、その作品だけではなく「宗長古人申し聞せたる次第」、つまり宗長が宗牧に語った内容にも価値を置いていることが分かる。

宗牧注二つ目のグループの最後の『天文九年梅宗牧両吟百韻』は天文九年四月に宗牧が近衛稙家と両吟したもので、天文十一年に「佐野藤九郎」という人物の求めによって注が書かれたことを示す近衛稙家の奥書

がある。これも、両吟の相手が近衛稙家であるという点が重要であり、さらに、武家等の求めに応じて自身の参加した作品の注釈を残しているのも前の二作品と共通している。これが天文年間に集中して成立しているのは、どのような背景によるものだろうか。

先ほど、宗長や宗碩の説を注釈に取り込んでいるということを確認した。同じことが古注釈だけではなく宗牧の連歌論書にも見られる。この時期に成立した『当風連歌秘事』の奥書を挙げる。(12)

右此の一冊は、あながちに吾が口心より出づるに非ず。宗砌、心敬、宗祇、兼載、宗長、宗碩より、詞口を以て之を示す者也。又は近日田舎辺、東の果て迄も一見に罷り下るべしと存じ立ち候。然れば、其方をも誘引すべき候之間、自然、此の道の人々尋ね候はば、斯くのごとく答へらるべき者也。

天文十一年三月廿一日　　宗牧在判

無為公江　進覧

天文十一年に「無為」に与えたとするが、これは息子の宗養のことである。伊勢の方に共に下向するにあたり、連歌の道に志す人に連歌についての質問をされた時に連歌師としてどのように答えれば良いかを記したものだ、としている。傍線を付した箇所で、これは宗牧独自の連歌論ではなく、宗砌、心敬、宗祇、兼載、宗長、宗碩から伝わった説だとしていることからは、宗牧自身がその後継者であり、今それを息子に伝えるのだ、という意識を見ることができる。

この期間に集中して宗長や貴顕との両吟の注釈、それも宗長・宗碩の説を取り入れ、さらにその師である宗祇をはじめとする連歌師の説の継承をも対外的に示す注釈や論書が残っているという点からは、宗牧が一流の連歌師として認められているというだけではなく、そのように見られるように宗牧が自身の正統性を周囲に示していると言っても良いのではないだろうか。はじめにで触れたように、宗牧が天文九年頃に北野の宗匠に就いたことも、この一連の作品と注釈の背景として重要だと考える。宗牧には他にも大永三年・四年の独吟月次百韻をはじめとして多数の連歌作品があるが、それらには注を付していない。この天文年間の宗牧の意識と、周囲から期待される役割を示すものであろう。

ここまで宗牧の百韻注の二つのグループを見てきた。宗祇の参加した規範となる作品の注と、自身の参加した両吟の自注である。連歌界での地位を確立し、それを盤石なものとして息子の宗養に継承させるためには、宗牧が宗祇・宗長・宗碩らの連歌を受け継ぎ、彼らが果たしてきた貴顕と武家、都と地方の橋渡し等の役割をも受け継いでいる必要がある。それを内外に示す一つの形が、これらの作品と注釈である、と言えるだろう。

次節では、都を離れた旅中でどのように注釈が成立したのかを見ていきたい。

四　第三グループの百韻注

第三グループの『東国紀行』の旅中の天文十三年・十四年の作品とその注釈の成立事情について見ていく。

『東国紀行』の旅について確認しておく。(13)『東国紀行』は宗牧の紀行文で、天文十三年九月に子の宗養らを伴って都を立ち、翌年の三月に江戸に着き、浅草の観音堂に参詣して隅田川に向かうまでの旅の様子を記している。尾張で織田信秀に女房奉書を渡すなど、武将との交流や連歌会

の記録が見える。宗牧はその後、天文十四年九月に下野国佐野で客死しており、都に帰ることはなかった。

この旅の中で宗牧は『天文十三年十二月宗牧独吟百韻』・『天文十四年二月宗牧独吟百韻』・『天文十四年土岐原治英所望宗牧独吟百韻』の三つの百韻の注釈を残している。まず注目されるのは、全て独吟だという点である。前項までに見た宗牧の参加した付注百韻は、三吟・両吟で、宗牧独吟のものはなかった。それに対し、旅中の付注百韻はどれも独吟である。旅中での百韻は独吟がほとんどなのだろうか。それとも付注の作品が独吟であることには別の理由があるのだろうか。

『東国紀行』の中で、連歌は基本的に発句しか挙げられないが、その発句は、例えば次のように書かれている。天文十三年閏十一月四日の記事を挙げる。

わだつ海のかざしの花か雪もなし

海上の雪たまらぬさまをかやうに取り成し侍り。おぼつかなし。いま一座懇望とて、円福にして、

水鳥のをりはへあやのうき藻かな

見えたるままなり。

このように『東国紀行』の中には、古注釈のように自身の発句について、何を詠んだものか、どのような景だったかなどを説明している箇所がある。誰がその連歌会に参加したかなどの詳細は描かれないが、客人として手厚く迎えられ、各所で連歌に参加している様子が読み取れる。基本的にはこのように、独吟ではなく、その土地の人々と連歌を興行するものである。

さらに、この独吟の第三グループの百韻が現存しているのにも理由があるのであろう。『東国紀行』の旅で宗牧が加わった連歌は数多く確認できる。

天文十三年九月二十日過ぎに都を立った後、宗牧は『東国紀行』の中にあるだけで、七十句の発句を詠んでいる。そのうち、連歌会や独吟を含む当座の連歌で詠んだ発句が六十句、別の場所等から所望されて詠んだ発句が十句である。

しかし、このうち現在百韻・千句として確認できる作品は、天文十三年十月十五日の永田氏弘のもとでの百韻と、天文十三年閏十一月二十五日の西郡千句第四百韻、そして、『天文十三年十二月宗牧独吟百韻』と『天文十四年二月宗牧独吟百韻』の四つのみで、ほとんどの連歌は現在残っていない。

『東国紀行』の記述は天文十四年三月までしかないが、その後亡くなる九月二十二日までを見ても同様のことが言える。小川幸三「宗牧『東国紀行』補綴―金沢市立図書館本を中心に―」[14]では、その期間の宗牧の連歌作品について、金沢市立図書館本『宗牧句集』を基本資料として、様々な資料を挙げる。その期間の宗牧が参加した連歌で現在確認できるのは、天文十四年四月十六日の土岐原治英所望による宗牧独吟百韻と天文十四年五月八日の宗牧・道増他による百韻の二つのみである。

こうして見ると、旅中の土地土地での連歌会での連歌はほとんどが失われた中で、宗牧の独吟百韻が三つ残り、その自注を載せる本も残っているのは、それだけ宗牧の独吟が珍重され、人々に読まれたことの証左であろう。

では、どのようにその独吟百韻が成立し、注釈が付されたのかを見ていきたい。

まず天文十三年十二月二十八日の宗牧独吟百韻[15]だが、これは師宗長の追善のために詠まれたものである。『東国紀行』には、宗長の息子の誰

庵と連れ立って宗長の墓参りをする場面があり、その後に次の傍線を付した発句が載る。

府中に来て、

見れば見し跡とふ雪の山路かな

と思ひ続け侍り。彼物語のこの山の段に、かかる道はいかでかいまするといふを見れば、見し人なりとか有りける詞を取りたるばかりなり。是を誰庵につかはしたらば、必ず興行せらるべし。あまり月迫なれば煩はしさもいかがにて、独吟につかうまつりたり。

ここでは、誰庵にその発句を見せたら連歌を興行せざるを得なくなるが、十二月の末も迫っているので煩わしいことも良くないと思い独吟にした、と書かれている。この発句について、自注では次のように説明している。

見ればみし跡とふ雪の山路哉　宗牧

誰庵ともなひ柴屋古跡見侍しに、発句とて所望ありしを、とみの事なれば出来がたくて、府中一花堂旅亭に帰り、年の終はりの手向もやと侍り。此五文字、彼物語に「修行者逢たり。かかる道はいかでいまするを、と云ふを見れば、見し人なりけり」とあれば、所柄思ひよそへられて、誰庵の教へ、見れば見し旧跡なりと云ふ心にや。

『伊勢物語』第九段の地の文を典拠にした発句で、宇津の山が近く、宗長の旧跡だということも思い合わせて詠んだ、と説明している。『東国紀行』では「煩はしさもいかがにて」独吟にしたと書いていたが、旅宿で誰庵等と連歌を興行するのではなく、師宗長の追善のために思いを込めて詠んだ百韻だということが窺える。

次に、天文十四年二月二十五日の宗牧独吟百韻の考察に移る。この百韻の古注釈は、金子金治郎によって、第一種注の宮内庁書陵部蔵桂宮本、第二種注の大東急記念文庫蔵本・天理図書館蔵本に分類されてきた。[16] そこで金子は「なお京大谷村文庫『連歌集』所収本の注は、繁簡はあるが第二種になろう」とするが、第二種注と比較すると差異が見られ、同じ系統の注とは言い難い。京都大学附属図書館谷村文庫蔵本を第三種注とする。また、富山市立図書館山田孝雄文庫にもこの百韻の注釈があり、第一種注と近い内容を持っているが、厳密には差異が認められるので、第四種注とする。

この百韻の成立の状況については、『東国紀行』に詳しい記述がある。北条氏康邸での記事を引く。

太守より館の花いまだ盛りなれば、明夕参上すべきよし御内議あり。君卓のかざられ、庭籠の鳥、数々の面白さ、遣り水のかけひ雨に紛はず。水上は箱根の水海よりなど聞き侍りて驚くばかりなり。例の発句、又当座、

花の色も鳥の音おしむ夕哉

ただ今の景気成べし。この発句にて一折独吟にすべきよし、しきりの御事にて、然ば御脇をなど申侍ば、作者にとて、

霞にもるるこすの外の山

今日は二月廿五日、北野御神事、右京兆一日千句万代不休の吉日なれば、御稽古のはじめには尤珍重のよし申なして退出。

北条氏康の館で、花の盛りに庭には籠に入れられた鳥が鳴く、その豪華で興趣ある様子を発句に詠み込んだところ、その発句で「一折独吟」するように催促され、脇を詠むように促したら代作を命じられた、という場面である。館の「庭籠の鳥」と「花」を賞することによって、北条氏康への祝言としている。百韻注ではこの発句について、それぞれ次のように説明している。便宜上第一種注を①、第二種注を②と番号で表し、

第一種注に続けて順に第四種注まで並べた。[17]

1花の色も鳥の音惜しむ夕かな

①夕になれば鳥の音の絶ゆるを我が惜しむ心を推して、花も夕を残して暮れぬといふ儀なり。

②花の色には夕無き物也。鳥は夕を知りて音を絶ゆれば、花も鳥の音を惜しみて夕の色を見せぬかと也。こなたより鳥の音を惜しむ心より花に云ひかけたるなり。

③此の発句、庭籠を作り、鳥かはれし、先是を賞せし事也。心は鳥は暮れて音を留る事也。花は暮れても光ありて暮れぬ様なる間、花の香(ママ)も其の鳥の音惜しむかと也。花鳥に執心ある故、如此見出だしたる也。

④夕になれば鳥の音の絶るを惜みて花のしらしらと夕を残し鳥を鳴するかと云儀也。

比較すると、①と④はほぼ同じ内容で、どちらもこの百韻の成立に関わる記述は見られない。②は、端作りの賦物の下のところに「相州小田原氏康庭籠の座敷にて花を見せられし時、俄に独吟所望なり。当座一折して、後日百韻になり侍るなり」と成立事情の説明があるので、発句の注釈の方は句の内容の説明だけになっている。③は、庭籠の鳥を賞した句だということをまず説明している。端作りで「北条氏康」とあるべきところが「伊勢早雲」となっているのが不審である。各注間に大きな内容の差は無いが、①④が簡潔で、③が懇切な注である、という特徴は見える。

九十九番句の注では、

98明けにけらしも月かたぶきぬ（③④あけにけらしな）

99こゆるぎのいそぐも飽かぬ旅枕

①「こゆるぎ」は相模の国なり。此のふもとにての独吟なれば、其の所の名所を寄せしと也。

②相州の名所なれば、氏康の挨拶の心有り。明け方に急げども旅行過ぎがて成様也。

③こゆるぎの磯、相模の名所也。明けて旅立つべきも飽かぬ旅寝のよし、氏泰(ママ)への挨拶也。方違の時、伊与介子紀伊守にてのこと、「主も肴求めてこゆるぎのいそぎありく」などとあり。

④小余綾の磯、相模国也。氏康にての連歌なれば其所の名所をよせし也。

②③は氏康への挨拶に触れる点で共通しているが、①は連歌の興行場所の説明のみで、氏康のことには触れていない。④は氏康のもとでの連歌だとしている。また③は、他の注にない、『源氏物語』帚木の「小余綾の磯」に「急ぐ」を掛ける例を挙げている。

氏康から当座で独吟の一折を所望され、実際にその場でどこまで句を詠んだかは分からないが、この句で相模の小余綾の磯を詠み、急ぐ旅がもっとここに留まっていたい、としていて、それほど日数が経たないうちに百韻を独吟で完成させていることが窺える。『東国紀行』に拠ると、二十五日に発句を詠んだ後、二十八日に出立しているので、氏康邸にいる間に完成させて献上した可能性もある。

注釈の成立を考える際に、本文の異同は大きな意味を持つ。七十二番句の注を、句とともに掲出した。前句の七十一番句は異同なく「隔らん遠方人の峰の雲」という句である。

①あひみんまでも心(のイ)くるしも

あひみんまで、遠方人を帰(隔カ)るかと詠は、くるしからんといふ儀也。

②あひみむまでのながめくるしも
　嶺の雲を詠てあひみんまでとうち侘たる様也。
③あひ見むまでのながめいつまで
　旅行人を峰の雲も隔らむとなり。あふまでのことはいつまでのながめならむ、となり。
④あひ見んまでのながめくるしも
　又あはんまで遠方人にあたりも詠ればくるしきとなり。

傍線部に異同があるが、①②④の注の内容から、もともとの句形は「ながめくるしも」だと推定される。①は「心くるしも」となっているが、注中で「詠は（ながむは）」としているので、注が書かれた時は「ながめくるしも」の形で、その後句に異同が生じたと考える。それに対して③の注は「ながめいつまで」という句に対応する形で注が付されている。①②④と③の注が別々に成立していることが分かる。

十三番句の①の注に「此てにをは、初心にてはいかがの由申され候」とあり、宗牧からの聞き書きのように見えることを考え合わせると、①の注は比較的宗牧に近いところで成立し、④・②がそれに次ぎ、③の注は時代が下ると見るべきであろう。

北条氏康への献上を念頭に置いて宗牧が独吟で詠んだ百韻で、その後の旅中にその百韻について宗牧が語る場があったことを想定すると、作品の成立と注釈の成立がほとんど同時で、注釈することを念頭に置いて句を詠んでいる可能性すらあるかもしれない。

詠作事情は分からないが、天文十四年四月十六日の土岐原治英の所望による宗牧独吟百韻[18]も、発句でも連歌会でもなく「独吟百韻」を最初から所望されたとするなら、注釈するに値するような作品を作ろうという意識を持って連歌を詠むのではないだろうか。

つまり、旅の中という制約によって、逆に、連歌と注釈が連関を持って成立する場もあるのではないかと考える。帰路の連歌会の約束等の記述が『東国紀行』に見えるので、宗牧自身はこの旅中で死ぬとは思っていなかった。しかし、高齢なこともあり、東国で歓待してくれる武士達だけでなく、同行している年若い息子宗養のためにも、独吟で連歌を巻き、それに注釈を加えて規範的なものとして残すということを旅の中で行っていたのである。二節・三節で、宗牧が宗養への連歌道継承を意識していたことを指摘したが、この旅中の独吟百韻とその注釈の成立もその視点で見るべきであろう[19]。

五　おわりに

金子金治郎は『連歌古注釈の研究』の中で、次のように古注釈を時代ごとに概観し、宗牧の時代（宗祇門流の時代）を、注釈が「盛行して頂上に達」した時期だとしている。

成立期　応仁前後までの七賢の時代。
　注釈は諸分野を開拓するが百韻注には及ばない。
宗祇の時代　応仁以後宗祇中心の時代。
　百韻注の登場によって分野が拡大する。
宗祇門流の時代　宗牧没（天文十四）前後まで。
　注釈は盛行して頂上に達する。
紹巴の時代　安土桃山の紹巴中心の時代。
　注釈の分野は縮少し、固定する。

これは、松本麻子が「連歌「古注」の変遷[20]」で、宗牧の時代の古注釈が武家を対象に作られたものだと指摘することと密接に関係している。

『東国紀行』で宗牧が、

この会以後早々まかり立つべきにさだめたれば、下内太郎左衛門して、池田宮内卿、平井右兵衛尉、其外若衆達、連歌の抄一巻、なにても講釈懇望有。宗祇詠草のうち、『下草』のうち耳遠なる句も有りなど言ふ人有りて、又四五日逗留。

と書くように、地方の武家が連歌に参加するようになり、注釈や講釈の需要が高まっていく、ということがある。以前、拙稿「付句集『春夢草』古注の性格」[21]で、二つの注釈（『春夢草』第一種注・第三種注）が、同じ資料をもとに書かれていることを指摘したが、このような多様な注釈の成立も、武家への講釈やその聞き書き等が広範に行われたためである。講釈・聞き書きから注釈という形に整備したり、注釈をもとに新たな注釈を著すことも行われた。注釈を手元に置いて講釈するということも行われている。そこには、宗長から宗牧へ、宗牧から宗養へ等、連歌師から連歌師へ師説を受け継ぎ再生産する動きも関わっている。師の説を書きとどめ、それを自身のテキストとする、という規範的作品の設定が、注釈の隆盛を支えていた部分もあるのではないか。

そして、その規範とすべき作品を作ることと、それに注釈を付すことがほとんど同時期に行われるという点に、座の文芸としての連歌の作品と注釈の特徴が現れている。注釈はそれ自体が規範的なものだが、連歌の注釈の目的とするところは、その注釈によって連歌の作法や基礎的な知識を身につけ、連歌に参加するということなのである。

連歌作品と古注釈の多様な成立状況は、連歌の享受層の広がりがもたらしたものであり、それは連歌に限らず、戦国期の武家、特に地方大名やその家臣団における文化的営為の興隆の中に位置づけられるものである。

【付記】本稿はJSPS科研費（課題番号18J14018）による研究成果の一部である。

註

（1）連歌の古注釈についての先行研究には、歴史的展開を総括した金子金治郎『連歌古注釈の研究』（角川書店、一九七四年）、自注の存在から連歌の性格について論じた島津忠夫「自注のある文芸ということをめぐって」（『島津忠夫著作集 第二巻』、和泉書院、二〇〇三年）、古注釈の対象と目的を明らかにした松本麻子「連歌「古注」の変遷」（『文学』十二巻四号、二〇一一年七月）、兼載の作意を古注釈から探った長谷川千尋「兼載「三句め」の技法」（『京都大学国文学論叢』十三号、二〇〇五年三月）、「句解の分岐点―『聖廟法楽千句』古注をめぐって」（『ビブリア』一二五号、二〇〇六年五月）などがある。

（2）宗牧の事績については木藤才蔵『連歌史論考 下』（明治書院、一九九三年）参照。宗匠の継承については、金子金治郎「連歌宗匠の行くえ」（『國學院雑誌』七二巻一一号、一九七一年一一月）に考証がある。

（3）『湯山三吟百韻』・『小松原独吟百韻』・『宗祇独吟何人百韻』とその注釈や奥書の本文は、金子金治郎『宗祇名作百韻注釈』（桜楓社、一九八五年）に拠る。なお、資料の引用に際し、読みやすさを考慮して私に表記を改めた箇所がある。以下の引用についても同様である。それぞれの百韻・注釈の成立事情については、註1前掲の金子金治郎『連歌古注釈の研究』（角川書店、一九七四年）にそれぞれの注釈についての解説がある。以下に引用する金子金治郎説は、特に断らない場合全てこの書に拠る。

（4）『矢嶋小林庵百韻』の本文は九州大学文学部蔵本（新日本古典籍総合データベースの画像、https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100023723/viewer/1）に拠った。『享禄五年住吉法楽百韻』・『天文九年梅宗牧両吟百韻』の本文は桂宮本叢書第十八巻『連歌一』（養徳社、一九五四年）に拠る。それぞれの成立事情については、註1前掲の金子金治郎『連歌古注釈の研究』（角川書店、一九七四年）に解説がある。

（5）この百韻とその注釈を中心に、宗牧の連歌について宗長との関係から論じた竹島一希「宗牧と宗長」（『国語国文』七十九巻七号、二〇一〇年七月）では、付合において前句の言葉に応じる緻密さは宗長から宗牧に受け継がれたものだとする。

（6）『実隆公記』巻八（『続群書類従完成会太洋社、一九五八年）に拠る。

（7）『私家集大成』（日本文学Web図書館、古典ライブラリー）の実隆1～3解題の

『再昌草』御所本による補遺に拠る。

（8）　和歌の本文の確認は、新編国歌大観（日本文学Ｗｅｂ図書館、古典ライブラリー）で行った。『連珠合璧集』（『連歌論集　一』三弥井書店、一九八五年）でも、「山梨トアラバ」の項にこの新古今和歌集一四七三番歌を挙げており、「山梨」と「苧生の浦波」は寄合である。

（9）　桂宮本叢書第十八巻『連歌　一』（養徳社、一九五五年）に拠る。

（10）　米原正義「越前朝倉氏の文芸」（『國學院雑誌』六三巻十・十一号、一九六二年十一月）、『戦国武士と文芸の研究』（桜楓社、一九七六年）、木藤才蔵『連歌史論考　下』（明治書院、一九九三年）に拠る。畠山義総についてはここでは詳しく触れないが、連歌師や五山僧などを媒介として都の実隆等と文化的交流を持つ様子は前田雅之「畠山義総の『山谷詩集』入手方法」（『書物と権力　中世文化の政治学』吉川弘文館、二〇一八年）等によって知られる。宗牧と宗長、宗牧と実隆の両吟を注釈を付して送るよう求めるのは、大いにありうべきことである。

（11）　『享禄五年住吉法楽百韻』の方は正月張行で、その年の三月に宗長が没しているので、宗長によるコメントがあったかは分からない。『矢嶋小林庵百韻』の宗牧注は、奥書にある通り、宗長の指導の内容を詳細に残している。

（12）　『連歌論集　四』（三弥井書店、一九九〇年）に拠る。

（13）　『東国紀行』の旅の旅程や登場する武家や僧等については鶴崎裕雄『戦国の権力と寄合の文芸』（和泉書院、一九八八年）に詳しい考察がある。金子金治郎『連歌師と紀行』（桜楓社、一九九〇年）も宗牧の紀行について書いている。これ以降の『東国紀行』の引用は『群書類従』第十八輯（続群書類従完成会、一九二八年）に拠る。

（14）　金子金治郎編『連歌研究の展開』（勉誠社、一九八五年）所収。

（15）　古典研究会叢書別巻四『梵燈庵主返答書　百韻連歌集　歌道聞書』（汲古書院、一九七五年）の影印に拠る。

（16）　金子金治郎『連歌古注釈の研究』（角川書店、一九七四年）。

（17）　この百韻の第一種注の宮内庁書陵部蔵桂宮本は桂宮本叢書第十八巻『連歌　一』（養徳社、一九五四年）に拠る。第二種注大東急記念文庫蔵本は大東急記念文庫善本叢刊　中古中世篇　第九巻『連歌Ⅱ』（汲古書院、二〇〇九年、解題　長谷川千尋）に拠る。第三種注の京都大学附属図書館谷村文庫蔵本は京都大学貴重資料デジタルアーカイブの画像（『連歌集』https://rmda.kulib.kyoto-u.ac.jp/item/rb00012774）に拠る。第四種注の富山市立図書館山田孝雄文庫蔵本は新日本古典籍総合データベースの画像（https://kotenseki.nijl.ac.jp/biblio/100262753/viewer）に拠る。

（18）　金子金治郎編『連歌貴重文献集成』第十集（勉誠社、一九八二年）に拠る。

（19）　小川幸三「宗牧『東国紀行』補綴―金沢市立図書館本を中心に―」（註14前掲書所収）にも指摘があるが、『二根集』に、宗牧が旅中に詠んだ句について宗養が山田で語った記事が見える。宗養が宗牧から連歌師としてのあり方を受け継いだ、一つの表れだと言えよう。

（20）　註1前掲論文。

（21）　『日本詩歌への新視点　廣木一人教授退職記念論集』（風間書房、二〇一七年）所収。